

仏師快慶の実像を追い求めて ―特別展「快慶」の成果をふまえた大型図録の出版―

当館学芸部主任研究員 山口 隆介

平成二十九年(二〇一七)春、奈良国立博物館で特別展「快慶 日本人を魅了した仏のかたち」を開催した。運慶と並び称されてきた、わが国を代表する仏師快慶を単独で取り上げた初の特別展であり、世に知られる快慶作品の約八割が一堂に会した。さらに、アメリカの美術館が所蔵する三件四点の作品が里帰りを果たすなど、所蔵者をはじめ多くの方々のお力添えにより史上空前の内容が実現した。

会期中には、等身大までの木彫立像が調査可能な大型文化財用X線CTスキャン装置が導入された。CT調査は、従来のX線透過撮影に比べて木取りや木寄せの方法を詳しく知ることができる。像内納入品の形状や納入状況も詳細かつ立体的に把握することができる。快慶が生涯に数多く手がけた像高三尺(約九〇cm)の阿弥陀如来立像のうち奈良・光林寺像〔図1〕は、X線撮影では像内に縦長の物体がぼんやりと写る程度だったが、CT調査により体部に巻子状の品一巻(直径約二・七cm、長二〇cm)を納入していることが確認された〔図2〕。さらに複数の阿弥陀如来像をCT調査した結果、初期作品では左体側部に別材を削いでいたが、ある時期から左体側をふくむ頭体幹部を一枚から彫出する合理的な木取りを行うようになったことも判明した。快慶の仏像制作におけるノウハウが、次第に明らかになってきた。



〔図1〕 阿弥陀如来立像 (奈良 光林寺)

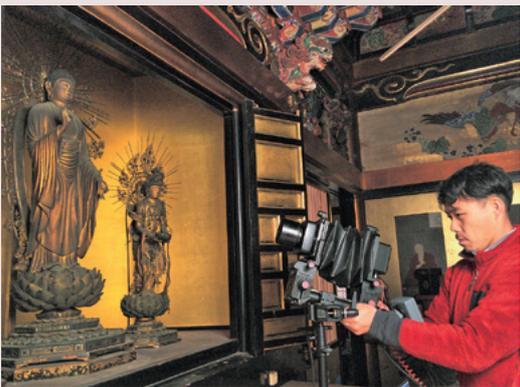


〔図2〕 同 体部垂直断面(3D)

展覧会は盛況のうちに幕を閉じ、所蔵者への作品返却を終えたころには、夏の展覧会の開幕が目前に迫っていた。日々の業務に追われ、特別展「快慶」は過去のものになりつつあったが、一方でわたしのもとには「展覧会で得られた成果を広く公表してほしい」という声が研究者のみならず一般の方からも寄せられた。CT調査に関しては、一部を研究者向けに報告したものの(山口隆介「快慶と工房制作―快慶展の知見をふまえて―」『研究発表と座談会 仏師とその工房をめぐる諸問題』公益財団法人仏教美術研究上野記念財団研究報告書四十五)二〇一九年、多くの人の目に触れるかたちで成果を公表するにはどうするのがよいのか、その方法を模索していた。

かつて当館では、展覧会が終わると、その後数年をかけて未出陳の作品をくわえ、図版の充実を図り、最新の知見を盛り込んで大型図録を出版していた。『観音菩薩』(同朋舎出版、一九八一年)、『仏舎利の荘厳』(同上、一九八三年)、『日本仏教美術の源流』(同上、一九八四年)、『法華経―写経と荘厳―』(東京美術、一九八七年)、『仏教説話の美術』(思文閣出版、一九九六年)などには、歴代研究員の活発な研究活動の成果が結実している。B4サイズの大型図版は、作品の迫力や細部の美しさを余すところなく伝え、収録論文や作品解説では展覧会で得られた最新の知見が披露されている。これらの大型図録から多くを学んで、今回も研究書としてのみならず、鑑賞のためのしみも広がるような書籍の刊行を目指すことにした。

展覧会の際には、信仰上の理由や保存状態の問題で出陳が叶わなかった作品もあったが、このたびの学術出版の意義を多くの所蔵者をご理解くださり、あらためて調査撮影の機会が与えられた。目下、高精度デジタルカメラを用いた写真撮影やCT調査を鋭意進めているところである〔図3〕。快慶作品に関する情報を網羅した資料集としての充実も大切だが、なによりも当館の写真技師が撮影した明瞭な写真を軸として、快慶芸術のすばらしさを実感していただける一書に仕上げたいと思う。刊行は令和三年(二〇二二)の予定である。



〔図3〕 和歌山・光善院阿弥陀三尊像の撮影風景